著作権法に基づき提供された複写物です。著作権者等の許諾がなければ、掲載・配信等ができない場合があります。国立国会図書館　2014年10月18日

硝煙下の桃源境

江南の「日の丸部落」

前線ははげしい揚子江岸近の宝山城の片隅に、我が軍の庇護によつて平和に甦つた二つの部落がある。その一つは「日の丸部落」といはれる農家数十戸の集落で、入口には「兵は文人を害さず」といふ文字が書かれてある。村長さん等に治まつてゐるのは旧軍警備隊長で、村民たちから先生々々と慕はれてゐる。約四百名の村民は、我が軍の保護によつて敗残支那兵の脅威をまぬかれ喜色を浮べて土に親しんでゐる新桃源境である

⇒　我が兵士に護られて野良仕事より部落へかへる日の丸部落の女子供の群（十月十四日　寺崎特派員撮影）

⇧　老人も居れば、娘さんもゐる。それに子供まで混つて、麗らかな秋日和のなかで綿をつみとる日の丸部落の人達。あの哀調を帯びた支那民謡の一くさりが、誰の口からか、のどかに聞えるのも秋らしい田園風景である（十月十四日　寺崎特派員撮影）

⇦　食べるものがなくなれば、皇軍の御飯が給され、働けば働くだけ賃銀を貰ひ、あまつさへ傷疾を負つた時は庇護を加へられて、此の戦乱に余念のない部落民の嬉しさうな顔を見るがよい（十月十四日　寺崎特派員撮影）

⇙　日の丸部落の事を聞いて遠来にかけつけて救ひを求めたのが、この家族だ。主人は事変中に病死、母親が二十と十四と十二の三人の娘を残して逃げ迷つた挙句、部落の誰一人も同伴して最後にたどりつき今では平和な村民として皇軍の庇護のもとにある（十月十四日　寺崎特派員撮影）

ストローの夢

—上海従軍餘録—

本社特派員　伊藤昇

上海塊點に眠る

八月二十六日——

敵前上陸三日目の呉淞、蘊藻浜から一歩陣けあがれば、そこには敵兵の死體が、酷暑の中で、[illegible]の太陽に、醜黒くふくれあがつてゐた。恐ろしい死臭が、ゲッとこみあげて、涙がでてとまらない。

その夜、陸戦部隊をめがけての敵の夜襲は物凄かつた。

赤煉瓦の建物に、敵の機銃の弾がパチッ、パチッとはねかへつてゐる。部隊長は、迫撃砲にやられた頭を、まんまるく繃帯で包んで、指揮を出してゐる。若い軍曹が、心配そうに側をはなれない。にもかゝはらず部隊長は電燈の光をたよりに、作戦を示して、終夜指揮にあたつてゐる。例の小島邊部隊長も、頭を繃帯でぐる〳〵巻である。

敵兵の砲弾が、ギラッ、ギラッと光る。その影が、段々、近く、戦場に揺れる。芝居で見る陣中を百倍、緊張させた空氣である。

撃つ。撃つ。敵の斜射が更に加はつた午前三時、部隊長は口を開いた。

「決戦の必要なし」

壮烈な激戦の中である。折返し前線の非常線電話長から、けたたましいベルの音にのつて、敵兵に生れた一首が送られた。

——月冴えて　虫の音やさし
わが陣にふさはしからぬ敵の銃聲

夜襲の一夜が明けると、朝の光は黄浦江をさへ青白く輝かせて此の書を呪ふ風景。

兵隊さんが殺敵の敵を十分わけてくれた。戦線の親切が身にしみて、たまらなくうまい。序[illegible]した肉の罐詰をあけてやる。むがいそぐ。無理にブリキ罐を刃物で剝つて、指を切つてしまつた。指からの血は、ドクッ、ドクッと、呼吸のたびに、あふれでて、ハンカチを巻いても、その上に滲れる。

兵隊さんに連れられて軍醫のもとに行つた。

軍醫「やられたな？」

記者「やられましたッ」

軍醫「戦傷か？小銃か？」

記者「ハイ罐詰であります」

軍醫「ようし。支那のヨーチンをつけてやる」

支那のヨーチンは、しみわたること勘りなし。

羅店鎮行

九月五日——

その朝、上海から小さな発動艇に乗ること約五時間、揚子江下流から呉淞鎮まで四里の道を歩く。

棉畑と黄金色の稲田をぬふ一本道を行く。劉家宅の少し手前で、吾々同僚四人の足もとに、小銃弾がチヂチと落ちる。ピュン、ピュンと頭の上を素通りする音には、多少馴れた吾々であるが、足もとの泥がチヂチとはちれては閉口である。

皇軍の進んだ道に落ちる弾——てつきり、吾々の服装が妙なので、我が前線の哨兵達が便衣隊と間違へてゐるのだらうと、[illegible]が止まる。暗くなる上げと、[illegible]にぶらさげてゐた明日の乾麺を大きく振げて、前進を続けた。

劉家宅に休んでゐた兵隊さんがニヤニヤ笑つてゐる。

兵隊「そこで撃たれたら？」

記者「便衣隊と間違へられてね。」

兵隊「ちがうよ。今日は敗残兵が出てきやがつて、自分等も今やられたところだ」

記者「ウ……それぢや明日の[illegible]では間に合はぬ訳だナ。」

そんな思ひをして、やつと辿りついた〇〇に行くと、今日はどうしても眠れるだけ眠れ、と云はれてしまふ。前夜から敵の砲撃がひどく正確になつて、みな壁片よけの掩蓋壕に眠るのだから、といふのである。更に、非戦闘員が死んでは申譯ない、ともいふので、それにさからうわけにもゆかず、少し後方の部隊に退却する。

[illegible]の畑を[illegible]する特務兵の小部隊に泊めて貰ふ。

尾道の弁護士北岡少尉がこんな話をしてくれた。

「自分は砲弾が怖ろしくて堪らなかつた。然し今日、自分がからやつてドロップの罐を開けようとしてゐると一緒、バサッとその罐にあたつて、命拾ひをした。もう弾は自分には當らないといふ自信がついた」

一罐以上のことが、戦線にはころがつてゐる。

夜道を走つて、連絡将校が〇〇から帰つてきた。

「おい、みんな〇〇特務兵は立派な戦死に救はれたぞ。戦死だぞ一等兵になつたぞ。名譽の戦死だぞ」

吾々の寝床の心配をしてゐた軽傷兵が、手にしてゐた雑嚢を放りだした。

「みんな寝かうぜ。俺達も一緒兵になるんだ」

敵にこの四里の道を歩く羅店鎮の戦線では、特務兵の駄馬の行進を忘れることが出来ない。

ストローの夢

九月十三日——

田上部隊が劉行鎮を攻略して間もなくである。

吾々はその夜大きな支那家屋に寝を敷いて眠る。戦友を枕に、[illegible]は新鮮な戦歌であるが、劉行鎮攻略が夜半から始まつて、大砲の轟音に、とても眠れない。

兵隊さんも皆な起きだして、何をするかと思ふと、敵陣から分捕つた大小の弾を叩き始める。砲弾は床置きにするし、小銃弾では日を作つて、銃眼にくばるのだといふ。戦線土産の相談であり、そこから吾人の戦跡話が引出されて思はず陣中座談会が始まる。

霧雨クリークの敵前渡河に駐屯した木島部隊の兵がそこにゐた。

「どうだ。自分は突撃の時の自分の顔に、びつくりしたよ。あれは自分の顔ぢやない。戦闘の時の顔は、大和人間の顔なんか、鬼の泣き顔みたいなもんだ」

これには全部「そうだそうだ」と共鳴した。さもあらん。

勇敢な将校木島少尉は、豪大の戦闘部隊の時、四度の負傷である。

[illegible]の穴から、青色の空壕が、ボカ〳〵と温かい風景を迎ふ。

記者が、ソーダ水を思ひだしてゐる時、その木島少尉が

「君、フルーツポンチが食ひたいナ」といつた。

そうしたら、横山の兵隊さんが聲を揃へて

「ぜんざい、ぜんざい」

と叫んだ。

兵隊とぜんざい——

ある野戦病院で記者が代筆させられた手紙の文句

——故郷を出る時、お前と二人で食つたぜんざいの味が忘れられない。

さくらフヰルム
高感光度・強整色性・微粒子
クロームスペシアル
パンＵＳＳ
パンＦ
其他

戦線流行り言葉

戦闘部隊の前線ではよく『お客さん』といふ言葉を使つてゐる。

戦闘間もなく吾が日本人女學校に立籠つたいけゆる渡口部隊に行つて、部隊長と屋上から眺望してゐると、其美路（租界と市政府を結ぶ一つの道）の方に敵が動いてゐる。

「ワア、お客さんがおみえになつた。おいしい御馳走をするかな」

といふ隊の下から揃熟な奴が、タタタと火を吹いて飛出したのであつた。

流行〇〇基地にも、この言葉は流行つてゐるが、こゝにはまたこここ独特の言葉がある。

「こつそりありましたから、こつそりとつてきましたワイ」

敵機の弾が地にも、空にも、海にも見えたから、みなやつつけて来ましたワイ、といふ意味である。

敵軍の前線では屢々、「支那さん」と言つてゐる。

例へば、支那軍が時々夜襲にやつてくる時、奇妙なラッパを吹いてやつてくる。そんな時

「支那さんはチャルメラを吹いてやつてくる」

といふ風に使つてゐるのである。

従軍記者の悲音

銃歌を耕け廻つて、疲れ切つて従軍記者は上海の合同に帰つてくる。弾の中を走つて、弾丸ばかりが、キリキリと尖つてゐる。

「敵公野郎、脚がくたばつてゐるぢやないか」

と殺氣る同僚の聲に、殺氣の眼を釁まされたこともあつた。

また——

「何が停戦協定だッ」

と叫んだ記者もあつた。實情その記者に聞いたら、こんな事を見てゐたのだそうだ。

敵の新公園（日本人、外人がよく散歩をする陸戦隊本部近くの公園）に行つたら、外人や支那人が日本人になじんで仲良く遊んでゐる。戦争中に何事だと怒つたら、停戦協定が成立したといふのだ。自分は今日前線から辛い思ひをして帰つてきたのに「何が停戦協定だッ」とやつつけたわけであつた。

軽がふきだした話は、英語の警官である。如何にも国際都市上海の警官らしいので一つ紹介しよう。

「ハロー、ハロー」

と、實に突然、記者の側に寄て来た日記者が声をだした。警官の職業で一同起きあがり、やつと寝ついたところで「こいつ寝言をいつてるな」と思つたが、それが英語である。

「ハロー、カム、ヒヤ」

と続けて、その言葉はイビキをかき始めた。

翌日例によつて追及してみると戦前から顔見知りの外国新聞の特派員と、偶然道で出合つたので、支那町の情報をとつてやらうと遠くから聲をかけたが、どうも彼の英語が聞かなかつたといふのであつた。

従軍記者の神経はトガつてゐる

——一九三七・一〇・二四——

(C)朝日新聞社　聞蔵Ⅱビジュアル
本サービスとその収録内容にかかる著作権その他一切の権利は、朝日新聞社または各権利者に帰属します。無断転載など権利侵害となるご利用はお断りします。
Copyright (C) The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.